目次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.8
第三講　演習問題(3)……p.14
第四講　演習問題(4)……p.22

第一講 演習問題(1)

次の文章は、『露殿物語』の一節で、露殿とかの君（遊女）が対話する場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ある時かの君、起きもせず寝もせ[a]ぬさまにうちしほれ、こぼれかかる鬢(びん)のはづれに伝ふ御涙はつらぬく玉のごとくにて、霜をおみたる女郎花(をみなへし)、下葉(したば)しほるる風情にて、いかにもほれぼれとうちしほれてましませば、露殿見給ひて、「何とてさやうにうちむつけさせ[A]給ふぞや。何ぞ御心に入らぬ事ばし候か、それがしに御うらみばし候か、[1]何事にても御心置かれず御物語候へ。夢いささか御心にたがふ事候まじ」と[B]のたまへば、かの君涙をおし拭(のご)はせ給ひて、「御恥かしき事に候へども、この上は何をかつつみ候べし。妾(わらは)が父母は大坂にさぶらひ給ひ[b]しが、慶長の世の乱れに、父は君のために命を軽んじ給ひ、母上は筑紫とかやにてみまかり[C]給ひたれば、わらはみなし子となりて、かなたこなたと流浪し、人商人(ひとあきびと)の手に渡り、今この所に売られ来て、かやうに流れを立て候ぞや。壁に耳、岩の物いふ世のならひ、天知る地知るわれ知る人知るにて、そんぢやうそれが娘なるが、父母におくれ、せんかたなさに身を売りて、流れを立つるあさましやと、[2]世の嘲(あざけ)りの候。みづか

らはとても心は浮かれ女の、浮かれそめにし身にあれば、とてもかくてもあり[c]な[d]めど、草の陰なる父母の、浮き名を流すあさましさ、悲しさ面目なさは、いはん方なく候へば、あはれみづからを夜まぎれに盗みとりて、いづ方へも具し行き給はり候へかし。御身とだにも添ふならば、虎臥す野辺、鯨寄す浦、いかなる岩木のはざまなりとも、[3]など住み憂からん」と、かきくどき給ひて、宛転（えんてん）たる双眼より、御涙をはらはらとこぼし[D]給へば、露殿聞こしめし、「うれしくも承るものかな。かねがねさうは思ひ候ひ[e]つれども、[4]御心中いかがとためらひ候ひて、今まで遅なはり候。いざさらば[5]思ひたち給へ。しかも今宵は人音もせず、禿（かぶろ）・香車（きやうしや）もあたりに見えず、よき隙に候へば、いざさせ給へ」とて、とる物もとりあへず盗みて負ひて出で、武蔵野さいて落ち行き給ふ。

暗さは暗し、行く先見えざれば、夜のほのぼのと明くるまで、武蔵野を迷ひ歩き給ふ。かくて夜も明け方に、主の男、「昨夜は[6]いつもの露殿とまり給ふが、いかで音し給はぬぞ」とて、行き見れば、女もなし。もとより露殿もゐ給はざりければ、「あなや」と思ひて、弓胡簶（ゆみやなぐひ）を負ひて追つかけけり。道行く人に、「かうかうのものは見ざるか」と問へば、「しかじか」といふ。「さらば」とて、武蔵野さいて追つかけ行くこそうたてけれ。

（『露殿物語』）

(注)
○鬢—頭の左右側面の髪。
○ほれぼれと—ぼんやりと。
○慶長の世の乱れ—慶長十九（一六一四）年の大坂冬の陣と、翌年の夏の陣。
○禿—遊女の雑用をする幼女。
○香車—遊女を監督し、雑事を仕切る老女。

問一　傍線1・6について、わかりやすく現代語訳しなさい。

1＝

6＝

問二　傍線2「世の嘲り（あざけり）」の対象となっていることは何か、三十字以内で説明しなさい。

問三　傍線３「など住み憂からん」と言ったかの君の心情について、最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア　あなたと一緒でも、不便な田舎暮らしはきっとつらいでしょう。

イ　あなたと一緒でも、逃げ続けるような旅の暮らしは不安です。

ウ　便利な町を離れての生活は、どれくらい大変なのか不安です。

エ　あなたと一緒に暮らせるなら、どんな場所でもつらくはありません。

オ　あなたと一緒に田舎で暮らせるなら、どれほど嬉しいことでしょう。

問四　傍線４「御心中いかがとためらひ候ひ」から読み取れる露殿の気持ちについて、三十字以内で説明しなさい。

問五　傍線５「思ひたち給へ」について、具体的に誰がどのような行動をとることか、十五字以内で説明しなさい。

問六　二重傍線ａ～ｅの助動詞について、終止形を示しなさい。また本文で使用されている活用形を次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号を複数回選んでもよい）。

ア　未然形　　イ　連用形　　ウ　終止形
エ　連体形　　オ　已然形　　カ　命令形

ａ＝　　ｂ＝　　ｃ＝
ｄ＝　　ｅ＝

問七　波線Ａ～Ｄの敬語について、その敬意の対象となっている人物を次の中から選び、記号で答えなさい（同じ記号を複数回選んでもよい）。

ア　露殿　　イ　かの君　　ウ　かの君の父
エ　かの君の母　　オ　人商人　　カ　主の男

Ａ＝　　Ｂ＝
Ｃ＝　　Ｄ＝

問八　作品と作者名を並べた次の①〜④を参考にして、空欄A・Bに入る作者名を漢字で答えなさい。

① 好色五人女・世間胸算用― A
② 奥の細道・笈の小文―松尾芭蕉
③ 玉勝間・古事記伝― B
④ 浮世風呂・浮世床―式亭三馬

A＝

B＝

模範解答

第一講

〔模範解答〕

問一　1　どんなことであってもご遠慮なくお話しくださいませ。
　6　いつものように露殿が泊まりなさったが、どうして物音を立てなさらないのか。

問二　両親に先立たれ、生活に困窮し、身を売り遊女となっていること。（三十字）

問三　エ

問四　かの君が、自分と同じ思いでいてくれているか不安な気持ち。（二十八字）

問五　かの君が露殿と夜逃げすること。（十五字）

問六　a　ず・エ　b　き・エ　c　ぬ・ア　d　む・オ　e　つ・オ

問七　A　イ　B　ア　C　エ　D　イ

問八　A　井原西鶴　B　本居宣長

〔現代語訳〕

ある時かの君が、起きているでもなく寝ているでもない様子で思いに沈んで、こぼれかかる頭の左右側面の髪のはずれに伝う涙は貫く玉のようであり、霜を帯びた女郎花の、下葉がしおれているような風情で、いかにもぼんやりと元気をなくしていらっしゃるので、露殿はご覧になって、「どうしてそのように機嫌をそこねていらっしゃるのか。何かお気に入らないことがございますか、私にお恨みでもおありですか、どんなことであってもご遠慮なくお話しくださいませ。少しもお心にそむくことはいたさないようにしましょう」とおっしゃると、かの君は涙を拭いなさって、「お恥ずかしいことでございますが、この上は何を隠しましょうか、いや、隠さず申し上げます。私の父母は大阪にいらっしゃいましたが、慶長の戦の際に、父は主君のために命を落とされ、母上は筑紫とかいうところで亡くなりなさったので、私は孤児となって、あちらこちらとさすらい、

人買いの手に渡り、今この女郎屋に売られてきて、このように遊女の身の上になっているのでございます。壁に耳あり、岩が物言う（などと諺にあるように、秘密が漏れやすい）この世の習いで、天知る地知る我知る人知るで、あれは誰それの娘であるが、父母に先立たれ、仕方なく身を売って、遊女として生きているあきれたことだと、世間の嘲りがございます。私はもう遊女となって、浮いた稼業をしている身であるので、どう嘲られてもかまいませんが、あの世にいらっしゃる父母の、悪い評判を流す情けなさ、悲しさ面目なさは、言いようもありませんので、ああ、私を夜に紛れて盗み出して、どこへでも連れて行ってくださいませ。あなただけでも一緒ならば、虎が臥す野辺も、鯨が寄ってくる浦も、どんなに岩や木が多い谷間であっても、どうして住みづらいことがありましょうか、いいえ、（どんな場所でも）つらくはありません」と、胸の内をこまごまと訴えなさって、美しい両眼から、涙をはらはらと落としなさると、露殿はお聞きになって、「うれしいことをお聞きしたものだなあ。前々から（私も）そうしたいと思っておりましたが、あなたの胸の内はどうであろうかとためらっておりまして、今まで（連れて逃げることが）遅くなってしまいました。さあそうならば決心なさいませ。しかも今夜は人の声もせず、雑用係の幼女も監視役の老女も辺りに見えず、よい機会でございますから、さあいらっしゃい」と言って、取る物も取りあえず（かの君を）盗み、背負って逃げ出して、武蔵野を目指して逃げて行きなさる。

たいそう暗く、行く先が見えないので、夜がほのぼのと明けるまで、武蔵野をさまよい歩きなさる。こうして夜が明ける頃に、（女郎屋の）主人の男が、「昨夜はいつものように露殿が泊まりなさったが、どうして物音を立てなさらないのか」と言って、（部屋へ）行って見ると、女もいない。もちろん露殿もいらっしゃらなかったので、「ああ大変だ」と思って、弓胡簶を背負って追いかけた。道を行く人に、「これこれの者を見なかったか」と尋ねると、「それそれ」と答える。「それならば」と言って、武蔵野を目指して追いかけて行くのは（二人にとって）厄介なことである。